

284. 平成10年度滋賀県下における 発掘調査の紹介（その2）

12. 黒漆塗手箱を納めた木棺墓の調査 中主町八夫 八夫遺跡

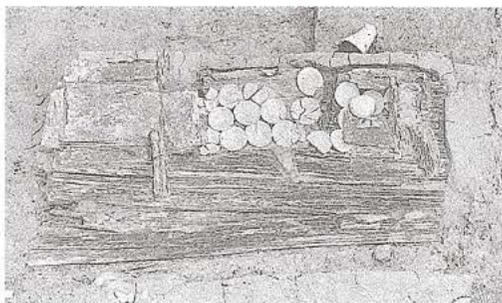
今回の八夫遺跡の調査は、野洲町大岩山の銅鐸出土地点から北西に約3kmの、旧家棟川扇状地の扇端近くに位置する八夫集落南側の水田約1.9haにおいて、病院並びに老人保健施設の建設に係わり発掘調査（第9次）を実施した。

これまでの調査では、昭和60年度と平成9年度に今回の調査地の北側約700mで弥生時代中期の環濠らしき溝の一部を発見したのを始め、集落の周辺において弥生時代前期から中世におよぶ遺構を検出している。

調査の結果、概ね3時期の遺構面を検出した。上層は鎌倉時代の遺構群で、耕作（畠作）に伴う素掘溝跡と小規模な掘立柱式建物群と溝で囲まれた屋敷跡の一部、井戸跡等を検出した。中層は平安時代後期の遺構群で、散在する掘立柱式建物跡や井戸跡、それに最も大きな建物跡の北側において木棺墓を1基検出した。下層は縄文時代晩期・弥生時代前期の散在する土壌等の遺構、弥生時代中期末～後期の方形・円形周溝墓7基と削平著しい集落跡、弥生時代中期初頭の地震による噴砂跡等が検出された。以下には中層より検出された木棺墓について明らかとなった点について記す。

木棺墓は、建物跡から約15m北側で南北方向に1基のみ検出した。木棺の内寸はおおよそ縦135cm×横65cm×高25cmで部材は比較的よく残っていたが鉄釘は見られず、部材の寸法や厚みが不揃いであることや墓壙が棺底と同じ大きさであることから、埋葬時に墓壙内において組立た可能性がある。棺内に人骨は残っていなかったが、棺内の遺物より北枕と想定される。棺内の埋納品は北（頭）側より合口造の黒漆塗手箱（おおよそ縦36cm×横26cm×高14cm）1個、中央に土師器小皿12枚をのせた三方1個、南（足）側に下段に土師器小皿9枚、上段に土師器小皿1枚をのせて重ねた折敷2個が出土した。この内手箱内からは、横櫛、白磁碗破片（パレット）、青白磁小壺等が納められており、特に小壺内からは白粉と考えられる水銀が、手箱底からは朱と思わ

れるものが遺存していた。しかし、鏡は残念ながら納められていなかった。埋葬された人物については年齢や性別などを明らかにできなかったが、木棺が小型であること、化粧箱が納められていること、烏帽子や刀子が無いことなどから、女性である可能性が高いと思われる。また、建物跡との位置関係から、この屋敷に関わる屋敷墓と考えることができるものであった。



木棺墓、棺蓋除去後の状況

今回の様に平安時代後期の化粧道具がまとまって出土した例はこれまでに3例と僅かであり、当時の風俗を知る極めて貴重な資料の発見といえる。

（中主町教育委員会 辻 広志）

13. 古墳時代中期の大型方墳を発見 蒲生町木村 木村古墳群

木村古墳群は、蒲生町川合・木村地先の平野部に位置する古墳時代中期の古墳群である。平成2年3月に県史跡の指定を受け、古墳群中の天乞山古墳・久保田山古墳（いずれも川合地区）を復元・整備し、現在、「悠久の丘 蒲生町あかね古墳公園」として活用を図っている。

調査は県営ほ場整備事業に伴うもので、調査対象面積は4000㎡である。調査の結果、従来より知られていた石塚古墳（円墳）の周濠と考えられる落ち込みから、須恵質の埴輪片を含む多くの円筒埴輪片が出土したほか、新たに古墳を発見した。

新たに見つかった古墳（神輿塚古墳と呼ぶ）の全容は明らかでないが、葺石の検出状況等から造り出しをもつ大型の方墳と推定される。

墳丘の規模は、一辺46m以上で、幅約15mの周濠を

もつ。墳丘西辺ほぼ中央に東西10m×南北20mを測る長方形の造り出しが設けられている。また、墳丘裾部には15～50cm大の割石（湖東流紋岩）が葺かれ、周濠部より円筒埴輪、須恵器、黒色土器が出土した。



神輿塚古墳 造り出し部

神輿塚古墳は出土した埴輪より古墳時代中期に築造されたものと考えられる。

木村古墳群は、今回の発見で5基以上の大型墳で構成されることが明らかとなった。また、群中の築造順位が、天乞山古墳→神輿塚古墳→久保田山古墳→ケンサイ塚古墳→石塚古墳と想定され、墳形が方形から円形に推移することが考えられる。今回の調査で、県下最大級の方墳・天乞山古墳と同規模の方墳が確認されたことは、木村古墳群の全容解明に大きな手がかりを示したとも言える。

（蒲生町教育委員会 福地博史）

14. 弥生時代後期の川辺の祭祀跡？

能登川町山路 ^{いしだ}石田遺跡

石田遺跡は、JR能登川駅の西約800mの大字林と大字山路、大字鉢光寺にまたがって存在している。遺跡の南側には、平成4・5年度に民間の宅地造成に伴う調査（林・石田遺跡）で、縄文時代の堅穴住居から西日本で3例目の屋内埋甕が検出されている。また、弥生時代後期から古墳時代前期の溝跡が長さ約110mにわたり検出され、大量の土器が出土している。

今回の調査は、能登川駅西土地区画整理事業に伴う道路建設に伴うもので、第3次調査となる。調査では、幅約14m、深さ約80cm（水田面から約1.5m）の河跡が長さ約20m検出された。河跡の南側から大量の弥生時代後期の土器が出土しており、その河岸から土器（鉢）の中に石を入れて沈めたあとが検出された。このことから、この場所で何らかの祭祀的な行為がされたことが考えられる。このような例は非常に珍しいもので、水辺の祭祀を考える上で貴重な一例である。

ほかに、河跡からは大量の土器の他に鍬や鋤などの農耕具や紡織具、槽（大型容器）、木包丁（木製穂摘具）、舟形木製品、建築部材などの木製品もたくさん出土し



土器（鉢）の中に石を入れて沈めた跡

た。

河跡が埋没する時期の土器（古墳時代初頭・布留式併行期）は、在来の土器（近江型）よりも、外来の土器（東海・大和・丹後？）の占める数が他の遺跡の出土例よりも多い傾向がみられる。このことは、石田遺跡がこの時期の湖東地方の拠点集落である中沢・斗西遺跡の分村的な性格を持つ集落の一つであることが考えられ、当時石田遺跡が琵琶湖に面していたことから、各地から中沢・斗西遺跡に行くための湖上交通の窓口的な集落であったことが考えられる。

（能登川町教育委員会 杉浦隆支）

15. 湖東三山のひとつ金剛輪寺の調査

秦荘町松尾寺 金剛輪寺遺跡

湖東三山のひとつである金剛輪寺は、天平13年(741)行基によって創建され、嘉祥年間(850年頃)円仁によって中興され天台宗寺院として現在まで存続している。金剛輪寺は、金剛輪寺史伝によると、最盛期に東西南北4谷に分かれ、百余りの坊舎を並べていたと伝えられる。これまで当遺跡は、10回の発掘調査を実施している。なかでも昭和62年～平成4年度にわたり、惣門から本堂までの現参道沿いにあたる北谷、東谷、西谷、院内の分布調査が行われており、58ヶ所の坊跡が確認されている。

今回の調査は、これまでに分布調査が行われていない南谷地区での南谷川堤堰工事^{みなとてい}に先立つもので、平成10年10月から平成11年3月まで秦荘町教育委員会が実施した。分布調査を約20,000㎡行い、発掘調査は約700㎡実施した。

調査の結果は、新たに約10ヶ所の坊跡と考えられるテラスと、尾根上で、上蚊野古墳群をみおろす岩場を発見した。包含層からは、古墳時代の遺物が若干出土した。

坊跡の中では、調査区3で一辺10m四方の堂の基壇が確認されている。基壇の正面中央には、階段状の出入口口施設がある。基壇上からは、寛永通宝が6枚検

出されている。そして、基壇に接して回廊状の石畳みが約1mの幅で確認されている。この坊跡からは、寛永通宝の他、天目茶碗や、土師器皿、近世陶磁器などが出土している。



金剛輪寺南谷坊跡調査区3

上記のように、南谷地区の坊跡の調査では、全盛期の室町時代ののち、17世紀前後に生活が営まれていたと考えられる。

(秦荘町教育委員会 竹村吉史)

16. 榑崎古墳群遺跡の発掘調査

多賀町榑崎 榑崎古墳群遺跡

榑崎古墳群遺跡は、犬上川によって形成された扇状地の扇頂部に位置する。団体営ほ場整備事業に伴う発掘調査を平成6年度より継続して行い、これまでに古墳時代後期の古墳37基や14～16世紀の豪族居館跡等が確認されている。

今回の調査は面積11,780㎡で、新たに24基の埋没古墳を確認した。横穴式石室を有する63号墳は直径約15mの円墳で、主体部全長5.9m以上(玄室長さ4m、最大幅1.2m)の右方袖タイプである。玄室内から須恵器の杯身・蓋、壺、高杯や金環、刀子が出土した。小石室を有する69号墳は、石室全長2.4m、最大幅0.7mで、直径約4mの円墳である。榑崎古墳群は、横穴式石室と小石室を有する古墳がそれぞれ混在しており、小石室を有するものも独立して築造されている。

榑崎古墳群は、ほとんどが円墳で構成されているが、今回の調査で一辺約6mの小石室を有する方墳(75号墳)が確認され、同古墳群内の支群構成を考える上で興味深い。

犬上川左岸の扇状地には最上流域に榑崎古墳群があり、放射状に大小の古墳群が下流域にまとまって存在している。下流域の古墳群の中には、渡来系の石室を有する古墳群が混在しており、その中で通有の横穴式石室を有する榑崎古墳群の調査資料は、扇状地に形成された古墳群の形成過程や築造集団の背景を探る上で貴重である。



75号墳(西より)

(多賀町教育委員会 本田 洋)

17. 縄文時代晩期末の土器棺墓群を発見 多賀町土田 土田遺跡

土田遺跡は、犬上川と芹川が近接する中間部に位置し、標高100m前後の平野部に所在する。これまでの調査で古墳時代後期から中世にかけての住居跡等が検出されている。

今回の調査は、県道拡幅工事に伴う工場移転予定地を平成10年10月から11月にかけて実施したもので、調査面積は約630㎡である。

調査の結果、縄文時代晩期末の土器棺墓22基が確認された。土器棺墓のほか土坑墓や木棺墓が混在して検出され、土器棺・土坑墓の中から人の歯や骨片が出土している。また、遺構面上から深鉢・浅鉢の破片、石鏃、磨製石斧等が出土している。



11号棺 検出状況

土器棺墓は、2個体の深鉢の口縁を合わせて横位に埋設するものや、1個体の深鉢に別個体の胴部などの破片で蓋をするものなどがある。棺に使用された土器は、型式差が見られ、東海系の突帯文土器などもある。

土器棺墓群は、検出状況から小群を構成し、一部に環状に形成された可能性のある群も確認された。今回の調査では墓地の広がりを確認できなかったが、縄文時代終末期の墓地の一つの様相を知ることができ、当

時の社会組織や家族構造を伺い知ることのできる貴重な資料になると思われる。

(多賀町教育委員会 本田 洋)

18. 戦国時代の山城で虎口を検出

米原町番場 鎌刃城跡

鎌刃城跡は米原町番場の南東、標高384mの山頂に築かれた典型的な戦国時代の山城である。今回米原町内に所在する中世城館跡の詳細分布調査の一環として発掘調査を実施した。

調査は城跡の北端に位置する曲輪にトレンチを設定しておこなった。その結果、城の出入口にあたる虎口が検出された。虎口は一辺6mの方形で、いわゆる枡形虎口となり、両側面を石垣とし、枡形の三方を石段とする構造で、全国的にも事例のないものである。さらにこの虎口に隣接して土塁囲いの曲輪に進路する通路が検出された。通路幅は約2mで、両側を石垣で築いており、横穴式石室をおもわせる。虎口や通路の石垣は天端がすべて崩れており、城割りによる破城を示すものとして注目される。



枡形虎口の石段

曲輪内に設定したトレンチからは柱間を6尺5寸とする5間×3間以上の礎石建物が検出された。削り残しの土塁直下に礎石が据えられている状況から、この建物は土塁を壁面とする半地下式構造であったと考えられる。北端の曲輪にこうした礎石建物が存在したことは防御の最前線として曲輪全体を槽状の重層の建造物で守っていたことを示している。

出土遺物で注目できるのは200本以上の鉄釘である。1～2寸の小さな鉄釘が大半で、縁や床に使用されたものと考えられる。その他土師器の皿、瀬戸美濃産の陶器、貿易陶磁等が出土している。これらは16世紀中～後期のものである。

小規模な調査ではあったが、織豊系城郭以前に石垣が採用されていることが明らかとなり、近江の戦国時代城郭の到達点を示す貴重な資料となろう。

(米原町教育委員会 中井 均)

19. 京極氏館に伴う城下町跡

伊吹町上平寺 上平寺城下町遺跡

上平寺城下町遺跡は伊吹山南麓の伊吹町上平寺及び藤川に所在している。標高は280m前後を測る。遺跡からわずか2kmで岐阜県関ヶ原町に至り、近江と美濃の国境の要所に位置している。

ここに北近江の大名京極氏の守護館跡・重臣屋敷跡・山城跡と、今回調査を行った城下町跡などの遺跡群がある。守護館跡には貴重な庭園遺構も見られる。江戸時代初期に描かれた「上平寺城古図」には、これらの遺跡群が描かれており、現在でも絵図どおりの良好な遺構が残っている。

京極氏がこの地に館を構えたのは、京極高清が一族の内紛をおさめた永正二年(1505)前後のことと考えられている。その後、浅井亮政らのクーデタで高清が尾張に逃れる大永三年(1523)までが遺跡の最盛期である。

今回の調査地は、絵図中に「上臈衆」と記された屋敷区画の一部と、「市店民屋」と書かれた町屋敷部分に該当する。

調査面積は約2500㎡、7つのトレンチ全てから遺構が検出されており現在も調査中であるが、主な遺構としては、4間×5間の掘立柱建物及び、2間×3間前後の掘立柱建物や、深さ1.5～2.5mの4基の石組井戸、屋敷地を区画する溝、焼け石や炭の積まった土坑などがあり、出土遺物は、京極氏段階に属するものが中心で、土師質皿、瀬戸美濃陶器、常滑甕、天目茶碗、青磁、白磁、土製鈴、石臼などがあり、他に土師器・須恵器がわずかに出土している。土師質皿には大きく2つのタイプがあり、京都系土師皿と作りの粗い在地系と思われるものである。



土師質皿の一括投棄

全体的な検討は、今後の課題であるが、絵図に描かれた城下町的な空間があったことが確かめられた。

(伊吹町教育委員会 高橋順之)